

Document made available under the Patent Cooperation Treaty (PCT)

International application number: PCT/JP2005/022007

International filing date: 30 November 2005 (30.11.2005)

Document type: Certified copy of priority document

Document details: Country/Office: JP
Number: 2004-348888
Filing date: 01 December 2004 (01.12.2004)

Date of receipt at the International Bureau: 19 January 2006 (19.01.2006)

Remark: Priority document submitted or transmitted to the International Bureau in compliance with Rule 17.1(a) or (b)



World Intellectual Property Organization (WIPO) - Geneva, Switzerland
Organisation Mondiale de la Propriété Intellectuelle (OMPI) - Genève, Suisse

日 本 国 特 許 庁
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出 願 年 月 日
Date of Application: 2 0 0 4 年 1 2 月 1 日

出 願 番 号
Application Number: 特 願 2 0 0 4 - 3 4 8 8 8 8

パリ条約による外国への出願
に用いる優先権の主張の基礎
となる出願の国コードと出願
番号

J P 2 0 0 4 - 3 4 8 8 8 8

The country code and number
of your priority application,
to be used for filing abroad
under the Paris Convention, is

出 願 人
Applicant(s): 三 洋 電 機 株 式 会 社

2 0 0 5 年 1 2 月 2 8 日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

中 嶋



【書類名】	特許願
【整理番号】	NPA1040152
【提出日】	平成16年12月 1日
【あて先】	特許庁長官殿
【国際特許分類】	C08G 79/00
【発明者】	
【住所又は居所】	大阪府守口市京阪本通2丁目5番5号 三洋電機株式会社内
【氏名】	蔵本 慶一
【発明者】	
【住所又は居所】	大阪府守口市京阪本通2丁目5番5号 三洋電機株式会社内
【氏名】	平野 均
【発明者】	
【住所又は居所】	大阪府守口市京阪本通2丁目5番5号 三洋電機株式会社内
【氏名】	林 伸彦
【発明者】	
【住所又は居所】	大阪府守口市京阪本通2丁目5番5号 三洋電機株式会社内
【氏名】	松本 光晴
【特許出願人】	
【識別番号】	000001889
【氏名又は名称】	三洋電機株式会社
【代理人】	
【識別番号】	100095382
【弁理士】	
【氏名又は名称】	目次 誠
【選任した代理人】	
【識別番号】	100086597
【弁理士】	
【氏名又は名称】	宮▼崎▲ 主税
【手数料の表示】	
【予納台帳番号】	026402
【納付金額】	16,000円
【提出物件の目録】	
【物件名】	特許請求の範囲
【物件名】	明細書 1
【物件名】	図面
【物件名】	要約書 1

【書類名】 特許請求の範囲

【請求項 1】

—M—O—M—結合（Mは金属原子）を有する有機金属重合体と、加水分解可能な基を1つだけ有する金属アルコキシド及び／またはその加水分解物と、ウレタン結合及びメタクリロキシ基またはアクリロキシ基を有する有機重合体とを含むことを特徴とする有機金属ポリマー材料。

【請求項 2】

無水有機酸及び／または有機酸がさらに含有されていることを特徴とする請求項 1 に記載の有機金属ポリマー材料。

【請求項 3】

前記有機金属重合体が、少なくとも2つの加水分解可能な基を有する有機金属化合物の加水分解及び重縮合反応により合成されていることを特徴とする請求項 1 または 2 に記載の有機金属ポリマー材料。

【請求項 4】

前記有機金属化合物のうちの少なくとも1種が、加熱及び／またはエネルギー線の照射により架橋する官能基を有することを特徴とする請求項 3 に記載の有機金属ポリマー材料。

【請求項 5】

前記有機金属重合体の硬化物の屈折率と、前記有機重合体の硬化物の屈折率の差が0.01以下であることを特徴とする請求項 1 ～ 4 のいずれか1項に記載の有機金属ポリマー材料。

【請求項 6】

前記有機金属重合体の金属原子Mが、Siであることを特徴とする請求項 1 ～ 5 のいずれか1項に記載の有機金属ポリマー材料。

【請求項 7】

前記金属アルコキシドの金属がSiであることを特徴とする請求項 1 ～ 6 のいずれか1項に記載の有機金属ポリマー材料。

【請求項 8】

赤外吸収分光分析において、前記金属アルコキシドに起因する 850 cm^{-1} 付近の吸収ピークを有することを特徴とする請求項 1 ～ 7 のいずれか1項に記載の有機金属ポリマー材料。

【請求項 9】

金属、金属酸化物、及び金属窒化物のうちの少なくとも1種からなる微小粒子を含有し、その微小粒子のサイズが 100 nm 以下であることを特徴とする請求項 1 ～ 8 のいずれか1項に記載の有機金属ポリマー材料。

【請求項 10】

請求項 1 ～ 9 のいずれか1項に記載の有機金属ポリマー材料を用いて光透過領域を形成したことを特徴とする光学部品。

【請求項 11】

透光性の母材の上に、前記光透過領域を形成したことを特徴とする請求項 10 に記載の光学部品。

【請求項 12】

前記母材が、高屈折率ガラスまたは高屈折率透光性セラミックであることを特徴とする請求項 11 に記載の光学部品。

【請求項 13】

複合型非球面レンズであることを特徴とする請求項 10 ～ 12 のいずれか1項に記載の光学部品。

【書類名】明細書

【発明の名称】有機金属ポリマー材料

【技術分野】

【0001】

本発明は、電気配線用基板、機械部品用材料、反射防止膜及び表面保護膜等の各種コーティング材料、光送受信モジュール、光スイッチ、光変調器等の光通信デバイス、光導波路、光ファイバー、レンズアレイ等の光伝搬路構造及びそれらを含む光ビームスプリッター等の光デバイス、インテグレートレンズ、マイクロレンズアレイ、反射板、導光板、投射用スクリーン等の表示デバイス（ディスプレイまたは液晶プロジェクタ等）関連光学素子、眼鏡、CCD用光学系、レンズ、複合型非球面レンズ、2P（Photoreplication Process）レンズ、光学フィルタ、回折格子、干渉計、光結合器、光合分波器、光センサー、ホログラム光学素子、その他光学部品用材料、光起電力素子、コンタクトレンズ、医療用人工組織、発光ダイオード（LED）のモールド材等に用いることができる有機金属ポリマー材料に関するものである。

【背景技術】

【0002】

金属やセラミックス等の無機系材料は、耐熱性、機械的強度、電気的特性、光学的特性、化学的安定性等に優れ、それらの機能を活かし、工業的に幅広く使用されている。しかしながら、一般的に脆性や硬度が高く、所望の形状に加工するためには、高温での成形や機械的加工等が必要となり、その用途が限定される場合がある。

【0003】

一方、有機重合体は成形性に優れ、柔軟性も有することから、加工性が良好である。しかしながら、耐熱性や化学的安定性においては、無機系材料に比べて劣る場合が多い。そこで、近年、金属アルコキシドを出発材料とした有機重合体が、有機無機ハイブリッド材料または有機無機ナノコンポジットなどと称されて盛んに開発されている。

【0004】

特許文献1及び特許文献2等においては、このような有機無機ハイブリッド材料を光導波路に応用することが試みられている。

【0005】

しかしながら、いずれの場合においても、金属アルコキシドを出発材料とし、いわゆるゾルゲル法と称されるプロセスで材料として必要に応じて水を添加し、加水分解反応を行うため、材料中には水分（ H_2O ）やシラニール基（ $Si-OH$ ）が多く残留する。特にシラニール基は、加熱等によって取り除くことが困難であるので、主に赤外領域での光損失の大きな要因となり、特に光通信波長帯である1500nm付近では大きな影響を与える。

【特許文献1】特開2000-356722号公報

【特許文献2】特表2001-506372号公報

【特許文献3】特開平6-322136号公報

【特許文献4】特開2003-195070号公報

【特許文献5】特開2000-336281号公報

【特許文献6】特開2000-34413号公報

【発明の開示】

【発明が解決しようとする課題】

【0006】

本発明の目的は、透光性に優れ、硬化後の硬度が高く、かつ高温・高湿下での信頼性に優れた有機金属ポリマー材料及びそれを用いた光学部品を提供することにある。

【課題を解決するための手段】

【0007】

本発明の有機金属ポリマー材料は、 $-M-O-M-$ 結合（Mは金属原子）を有する有機金属重合体と、加水分解可能な基を1つだけ有する金属アルコキシド及び／またはその加

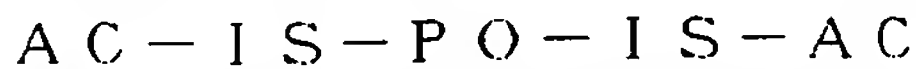
水分分解物と、ウレタン結合及びメタクリロキシ基またはアクリロキシ基を有する有機重合体とを含むことを特徴としている。

【0008】

本発明の有機金属ポリマー材料は、上記有機金属重合体と、上記金属アルコキシド及び／またはその加水分解物と、上記有機重合体を含んでいる。上記有機重合体は、ウレタン結合及びメタクリロキシ基またはアクリロキシ基を有する有機重合体であり、例えば、ポリオール末端に、ジイソシアネートなどのポリイソシアネートを用いて、水酸基とメタクリロキシ基またはアクリロキシ基を有する化合物を反応させて得られる有機重合体が挙げられる。

【0009】

具体的な構造としては、メタクリロキシ基またはアクリロキシ基を有する部分（アクリレート部分またはメタクリレート部分）をAC、ウレタン結合を有する部分（イソシアネート部分）をIS、ポリオール部分をPOとすると、



の構造を有するものが挙げられる。

【0010】

上記構造において、AC-IS間及びIS-PO間のうちの少なくとも一方がウレタン結合によって結合している。このウレタン結合の存在が本発明においては重要であり、このウレタン結合に由来する水素結合の凝集力により、本発明の有機金属ポリマー材料の硬化物において柔軟性及び強靱性が付与され、さらには高温・高湿下におけるクラックの発生等を防止することができる。

【0011】

上記のAC部分は、重合可能な基（炭素の二重結合）を有しており、光や熱などのエネルギーにより、有機重合体自身が重合したり、上記有機金属重合体と結合を形成したりして有機金属ポリマー材料を硬化させる働きを有する。

【0012】

上記のPO部は、有機重合体の柔軟性等の特性を与える部分であり、例えば、ポリエステル系ポリオール、ポリエーテル系ポリオール、ポリカーボネート系ポリオール、ポリカプロラクトン系ポリオール、シリコーン系ポリオールなどから構成される。

【0013】

上記構造の有機重合体は、一般にポリウレタンアクリレート系樹脂などと呼ばれており、従来においては、ガラス母材の上に透明樹脂層を形成し、複合型非球面レンズなどの光学部品を製造する際の透明樹脂層の形成用材料等として用いられている。このようなポリウレタンアクリレート系樹脂を単独で用いた光学部品においては、高温・高湿下における信頼性が不十分であるという問題があった。すなわち、高温・高湿下において、クラック等が発生し易いという問題があった。また、硬度が低く、キズなどが付き易いという問題や、耐熱性が不十分であるという問題もあった。

【0014】

本発明に従い、このようなポリウレタンアクリレート系樹脂と、上記有機金属重合体及び金属アルコキシド及び／またはその加水分解物とを併用することにより、上記従来の問題が解消されることがわかった。すなわち、高温・高湿下における信頼性を高めることができ、かつ硬度及び耐熱性を高めることができることがわかった。本発明は、このような本発明者の知見に基づくものである。

【0015】

本発明においては、上記金属アルコキシド及び／またはその加水分解物を含んでいる。上記金属アルコキシド及び／またはその加水分解物は、有機金属重合体に結合していない状態で含有されていてもよいし、結合した状態で含有されていてもよい。また、金属アルコキシドの加水分解物は、加水分解物の重縮合物であってもよい。

【0016】

本発明においては、加水分解可能な基を1つだけ有する金属アルコキシド及び／または

その加水分解物が含有されていることにより、有機金属重合体の分子の末端に発生した—OH基に、金属アルコキシド及び／またはその加水分解物が反応し、—OH基を消滅させることができる。このため、1450～1550 nmの波長範囲において生じる光伝播損失を低減させることができる。

【0017】

例えば、金属原子MがSiの場合、有機金属重合体の分子の末端には、—Si—O—Rで表されるアルコキシ基が存在する場合がある。このアルコキシ基は、水分を吸収して、加水分解し、以下のようにしてシラノール基を発生する。

【0018】



上記の反応で発生したROHは、揮発する。上記のシラノール基が存在すると、透過率が低下する。

【0019】

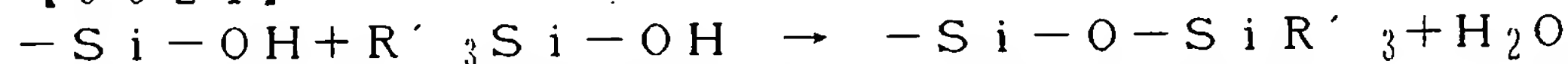
本発明に従い、加水分解可能な基を1つだけ有する金属アルコキシド及び／またはその加水分解物が含有されていると、上記のようにして発生したシラノール基を消滅させることができる。例えば、以下の式で示されるアルコキシ基を1つだけ有するアルコキシシランは、水分を吸収して以下のようにして加水分解する。

【0020】



なお、上記の反応において、R''OHは揮発する。上記のようにして生成した加水分解物は、有機金属重合体の末端のシラノール基と以下のようにして反応する。

【0021】



上記の反応により、有機金属重合体の分子の末端におけるシラノール基が消滅する。このため、本発明によれば、高い透過率を長期間維持することができる。

【0022】

上記のように、金属アルコキシドは加水分解され、加水分解物として作用するので、金属アルコキシドの形態で含まれていてもよいし、加水分解物の形態で含まれていてもよい。また、有機金属アルコキシドまたはその加水分解物が、有機金属重合体に結合しない状態で含有されている場合、有機金属重合体において新たに水分を吸収してその末端にシラノール基等が発生した場合、このシラノール基等に、結合していない状態の金属アルコキシドまたはその加水分解物が作用し、上記のようにしてシラノール基等を消滅させることができる。

【0023】

本発明において、上記金属アルコキシドまたはその加水分解物は、フッ素原子を含有するものであってもよい。すなわち、炭化水素部分における水素をフッ素原子に置換したような金属アルコキシド及びその加水分解物であってもよい。

【0024】

本発明において、有機金属重合体の—M—O—M—結合におけるMは、好ましくは、Si、Ti、NbまたはZrもしくはこれらの金属の組み合わせであり、特に好ましくはSiである。Siである場合、有機金属重合体は、例えばシリコン樹脂から形成することができる。

【0025】

本発明の有機金属ポリマー材料においては、無水有機酸及び／または有機酸がさらに含有されていることが好ましい。

【0026】

無水有機酸は、水分を吸収し加水分解するので、無水有機酸が含まれていることにより、有機金属重合体中の水分を減少させることができる。これにより水分が原因となる吸収が減少し、無水有機酸のみを添加することによっても、透過率を高めることができる。また、有機金属重合体中に含有された有機酸は、シラノール基等の反応を促進する。このた

め、シラノール基等が消滅するのを促進することができる。例えば、有機金属重合体の分子の末端のシラノール基等同士の反応も促進することができる。

【0027】

無水有機酸及び／または有機酸は、以下の理由により、本発明における有機金属ポリマー材料中にも含有されていることが好ましい。すなわち、加水分解可能な基を1つだけ有する金属アルコキシド及び／またはその加水分解物とともに、無水有機酸及び／または有機酸が含有されていることで、無水有機酸による水分の除去に加え、加水分解可能な基を1つだけ有する金属アルコキシドの加水分解物が有機金属重合体の分子の末端に発生した-OH基と反応し、-OH基を消滅させる反応が促進される。

【0028】

特許文献3及び特許文献4においては、加水分解性シラン化合物の加水分解反応を促進する目的で、触媒としてトリフルオロ酢酸を用いている。これは水を添加して反応を進めるゾルゲルプロセスの途中で反応溶液を酸性にするために添加されているものであり、無水トリフルオロ酢酸ではない。なぜならば、無水トリフルオロ酢酸は水と激しく反応し、直ちにトリフルオロ酢酸に変化するためである。また、本発明のように、最終生成物（硬化物）中に添加することや、酸無水物による光損失低減の効果については、何ら開示されていない。

【0029】

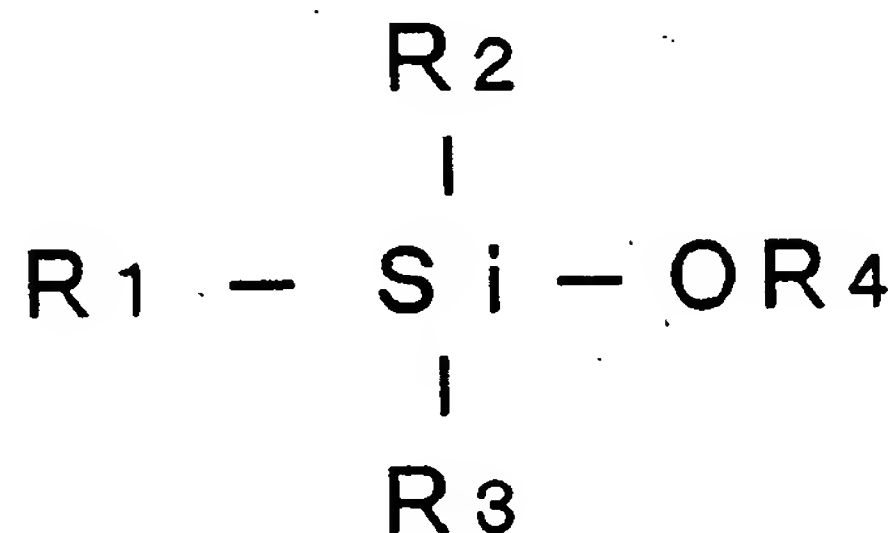
また、無水トリフルオロ酢酸またはトリフルオロ酢酸を添加する場合、その添加量は、赤外吸収分光分析で検出可能なレベルであることが好ましい。具体的には、トリフルオロ酢酸の吸収ピーク高さ（ 1780 cm^{-1} 付近）／Si-Oに起因する吸収ピーク高さ（ 1100 cm^{-1} 付近）の比が0.05以上であることが好ましい。

【0030】

上記金属アルコキシドまたはその加水分解物がアルコキシシランまたはその加水分解物である場合、以下の一般式で表されるものが一例として挙げられる。

【0031】

【化1】



【0032】

（ここで、 R_1 、 R_2 及び R_3 は、炭素数1～15の有機基であり、好ましくはアルキル基である。また、 R_4 は、炭素数1～4のアルキル基である。）

具体例としては、トリメチルアルコキシシラン、トリエチルアルコキシシランなどのトリアルキルアルコキシシランが挙げられる。アルコキシ基としては、メトキシ基及びエトキシ基等が挙げられる。

【0033】

上記無水有機酸の具体例としては、無水トリフルオロ酢酸、無水酢酸、無水プロピオン酸などが挙げられる。特に好ましくは無水トリフルオロ酢酸が用いられる。上記有機酸の具体例としては、トリフルオロ酢酸、酢酸、プロピオン酸などが挙げられる。特に好ましくはトリフルオロ酢酸が用いられる。

【0034】

本発明において、有機金属重合体は、例えば、少なくとも2つの加水分解可能な基を有する有機金属化合物の加水分解及び重縮合反応により合成することができる。このような

有機金属化合物として、例えば、有機基を含有するトリアルコキシシランまたはジアルコキシシランが挙げられる。有機基としては、アルキル基、アリール基、アリール含有基などが挙げられる。アリール基としては、フェニル基が好ましい。さらに好ましいものとしては、フェニルトリアルコキシシラン、ジフェニルジアルコキシシランが挙げられ、より好ましくは、フェニルトリエトキシシラン、フェニルトリメトキシシラン、ジフェニルジメトキシシラン、ジフェニルジエトキシシランである。

【0035】

また、上記有機金属化合物として、加熱及び／またはエネルギー線照射により架橋する官能基を有する有機金属化合物が含有されていることが好ましい。エネルギー線としては、紫外線、電子線などを挙げることができる。このような架橋する官能基としては、アクリロキシ基、メタクリロキシ基、スチリル基、エポキシ基、及びビニル基が挙げられる。従って、これらの官能基を有するトリアルコキシシランが好ましく用いられる。

【0036】

アクリロキシ基、メタクリロキシ基、スチリル基、及びビニル基などのラジカル重合性官能基を含有する場合には、ラジカル系の重合開始剤が含まれていることが好ましい。ラジカル系重合開始剤としては、例えば、1-ヒドロキシーシクロヘキシルフェニルケトン、2-ヒドロキシー-2-メチル-1-フェニルプロパン-1-オン、2-ベンジル-2-ジメチルアミノ-1-(4-モルフォリノフェニル)-ブタノン-1、オキシフェニルアセチックアシッド2-(2-オキソ-2-フェニルアセトキシエトキシ)-エチルエステル、オキシフェニルアセチックアシッド2-(2-ヒドロキシーエトキシ)-エチルエステル、及びこれらの混合物を挙げることができる。

【0037】

また、エポキシ基を有する有機金属化合物が含まれている場合には、硬化剤が含有されていることが好ましい。このような硬化剤としては、アミン系硬化剤、イミダゾール系硬化剤、リン系硬化剤、酸無水物系硬化剤などが挙げられる。具体的には、メチルヘキサヒドロ無水フタル酸、ヘキサヒドロ無水フタル酸、テトラエチレンペンタミンなどが挙げられる。

【0038】

官能基を有する有機金属化合物と、官能基を有しない有機金属化合物を混合して用いる場合、混合割合は重量比(官能基を有する有機金属化合物：官能基を有しない有機金属化合物)で、5～95：95～5であることが好ましい。

【0039】

本発明の有機金属ポリマー材料において、上記有機重合体の含有量は、5～95重量%であることが好ましく、さらに好ましくは40～95重量%である。上記有機重合体の含有量が少な過ぎると、高温・高湿下においてクラックが発生しやすくなり、光の吸収や散乱の大きな原因となる。また逆に上記有機重合体の含有量が多過ぎると、耐熱性が低下し、高温環境での劣化が進行することで、光学的特性、特に透光性が低下する。

【0040】

上記のように、上記有機重合体の含有量を5～95重量%の範囲内とすることにより、本発明の有機金属ポリマー材料をより透明な材料にすることができ、例えば波長630nmにおいて、厚さ3mmのサンプルの透過率として80%以上が得られる。また、上記有機重合体の含有量40～95%の範囲内とすることにより、透過率は90%以上となる。

【0041】

本発明の有機金属ポリマー材料において、上記金属アルコキシドまたはその加水分解物の含有量は、有機金属重合体100重量部に対し、0.1～15重量部であることが好ましく、さらに好ましくは、0.2～2.0重量部である。上記金属アルコキシドまたはその加水分解物の含有量が少な過ぎると、OH基が残留することで、1450～1550nmの波長範囲における吸収が増加したり、吸水率が高くなり、劣化しやすくなる。逆に、上記金属アルコキシドまたはその加水分解物の含有量が多過ぎると、高温環境において、過剰な上記金属アルコキシドまたはその加水分解物が材料中から脱離することでクラック

発生の原因となる。

【0042】

また、無水有機酸または有機酸の含有量は、有機金属重合体100重量部に対し、0.1～10重量部であることが好ましく、さらに好ましくは1～5重量部である。無水有機酸または有機酸の含有量は少な過ぎると、加水分解可能な基を1つだけ有する金属アルコキシドによるOH基の除去が不完全となり、逆に無水有機酸または有機酸の含有量が多過ぎると、高温環境において、過剰な無水有機酸または有機酸自体が材料中から脱離することで、クラック発生の原因となる。

【0043】

また、本発明の有機金属ポリマー材料において、上記有機金属重合体の硬化物の屈折率と、上記有機重合体の硬化物の屈折率との差は、0.01以下であることが好ましい。このように屈折率の差を0.01以下とすることにより、材料中の有機金属重合体の領域と有機重合体の領域の界面での屈折率差に起因する光の散乱が抑制され、90%以上の透過率が得られる。

【0044】

本発明の有機金属ポリマー材料は、IR測定チャートにおいて、上記金属アルコキシドに起因する 850 cm^{-1} 付近の吸収ピークを有することが好ましい。このような吸収ピークを有することにより、材料中に加水分解可能な基を1つだけ有する金属アルコキシドとしてのトリメチルシリル基が1分含まれていることとなり、材料中のOH基が効率良く除去されていることになる。

【0045】

また、本発明の有機金属ポリマー材料においては、金属、金属酸化物、及び金属窒化物のうちの少なくとも1種からなる微小粒子が含有されていることが好ましい。また、微小粒子のサイズは100nm以下であることが好ましい。

【0046】

金属粒子としては、金、銀、鉄などが挙げられる。

【0047】

金属酸化物粒子としては、酸化ケイ素、酸化ニオブ、酸化ジルコニウム、酸化チタニウム、酸化アルミニウム、酸化イットリウム、酸化セリウム、酸化ランタンなどが挙げられる。これらの中でも、特に酸化ケイ素、酸化ニオブ、酸化ジルコニウム及び酸化チタニウムが好ましく用いられる。

【0048】

金属窒化物粒子としては、窒化アルミニウム、窒化ジルコニウム、窒化チタニウムなどが挙げられる。

【0049】

上記微小粒子として屈折率の低いものを添加することにより、有機金属ポリマー材料の屈折率を低くなるように制御することができる。また、上記微小粒子として屈折率の高い微小粒子を含有させることにより有機金属ポリマーの屈折率を高くなるように制御することができる。屈折率を高めることができる金属酸化物粒子としては、酸化ニオブ(Nb_2O_5)粒子、酸化ジルコニウム(ZrO_2)粒子、酸化チタニウム(TiO_2)粒子が挙げられる。また、屈折率を低くすることができる微小粒子としては、酸化珪素(SiO_2)粒子が挙げられる。

【0050】

本発明の光学部品は、上記本発明の有機金属ポリマー材料を用いて光透過領域を形成したことを特徴としている。

【0051】

本発明の光学部品の具体例としては、例えば、透光性のガラス、セラミック、またはブラチックなどの母材の上に、本発明の有機金属ポリマー材料を用いて光透過領域を形成したものが挙げられる。厚みの薄い光学部品を作製する場合には、母材として、高屈折率ガラスや高屈折率透光性セラミックなどを用いることが好ましい。

【0052】

本発明の光学部品としては、複合型非球面レンズを挙げることができる。複合型非球面レンズは、ガラスなどからなる球面レンズの上に、透光性樹脂層からなる光透過領域を形成し、非球面レンズとしたものである。本発明の有機金属ポリマー材料は、上述のように、有機金属重合体や金属アルコキシド及び／またはその加水分解物を含むものであるため、ガラスなどに対して良好な接着性を有しており、ガラス母材の上に本発明の有機金属ポリマー材料からなる光透過領域を形成すると、密着性のよい光透過領域を設けることができる。本発明の光学部品は、本発明の有機金属ポリマー材料から形成されるものであるため、上述のように高温・高湿下における信頼性が高く、かつ硬度及び耐熱性に優れている。

【発明の効果】

【0053】

本発明の有機金属ポリマー材料は、上記有機金属重合体と、上記金属アルコキシド及び／またはその加水分解物と、上記有機重合体とを含むものであるため、透光性に優れ、硬化後の硬度が高く、かつ高温・高湿下での信頼性に優れている。

【0054】

本発明の有機金属ポリマー材料及びそれを用いた光学部品は、高温・高湿下での信頼性に優れ、硬度及び耐熱性が高いものであるため、電気配線用基板、機械部品用材料、反射防止膜、表面保護膜等の各種コーティング材料、光送受信モジュールや光スイッチ、光変調器等の光通信デバイス、光導波路、光ファイバー、レンズアレイ等の光伝搬路構造及びそれらを含む光ビームスプリッタ等の光デバイス、インテグレートレンズ、マイクロレンズアレイ、反射板、導光板、投射用スクリーン等の表示デバイス（ディスプレイまたは液晶プロジェクター等）関連光学素子、眼鏡、CCD用光学系、レンズ、複合型非球面レンズ、2P（Photoreplication Process）レンズ、光学フィルタ、回折格子、干渉計、光結合器、光合分波器、光センサー、ホログラム光学素子、その他光学部品用材料、光起電力素子、コンタクトレンズ、医療用人工組織、発光ダイオード（LED）のモールド材等に有用な材料である。

【発明を実施するための最良の形態】

【0055】

以下、実施例により本発明を詳細に説明するが、本発明は以下の実施例により限定されるものではない。

【0056】

以下のようにして、実施例1～8及び比較例1～3の有機金属ポリマー材料を合成した。

【0057】

（実施例1及び6～8）

有機金属ポリマー材料を、以下の工程Sにより合成した。

【0058】

<工程S>

（1）

表1に示す有機金属化合物A：10ml

表1に示す有機金属化合物B：4.1ml

反応触媒としての塩酸を含む水溶液（濃度2Nの塩酸：1.65ml）

エタノール：20.5ml

を混合した後、24時間放置することにより有機金属化合物A及び有機金属化合物Bを加水分解し、重縮合させた。

【0059】

（2）

得られた重縮合物の液4mlをシャーレにとり、重合開始剤として1-ヒドロキシシクロヘキシルフェニルケトンを10mg溶解した後、10.0℃で加熱することにより

、エタノールを蒸発除去し、約 1 g の粘性液体 A を得た。

【0060】

粘性液体 A 1 g に

表 1 に示す金属アルコキシド X : 3 ml

表 1 に示す有機酸 Y : 0.8 ml

を混合し、24 時間放置した後、100℃に加熱乾燥することにより、過剰の金属アルコキシド X 及び有機酸 Y を蒸発除去し、粘性液体 B を得た。

【0061】

(3)

粘性液体 B 0.55 g に対し、表 1 に示す有機重合体 Z Z を 0.45 g (45 重量%) 添加した後攪拌して、粘性液体 C を得た。

【0062】

この粘性液体 C に紫外線を照射して硬化させ、硬化させたサンプルについて上記実施例と同様にして評価し、結果を表 1 に示した。

【0063】

なお、有機重合体 Z Z としては、各実施例において以下のものを用いている。

【0064】

実施例 1 : ウレタンアクリレート系光硬化樹脂

実施例 6 : ポリエステルアクリレート系光硬化樹脂

実施例 7 : エポキシアクリレート系光硬化樹脂

実施例 8 : シリコンアクリレート系光硬化樹脂

なお、上記各光硬化樹脂は、以下の通りである。

【0065】

ウレタン系アクリレート系光硬化樹脂は、AC 部がメタクリロイル基からなり、IS-PO 部がウレタンプレポリマーからなる。

【0066】

ポリエステルアクリレート系光硬化樹脂は、AC 部がアクリロイル基からなり、IS-PO 部がアルコールからなる。

【0067】

エポキシアクリレート系光硬化樹脂は、AC 部がメタクリロイル基からなり、IS-PO 部がグリシジルエーテルからなる。

【0068】

シリコン系アクリレート系光硬化樹脂は、AC 部がメタクリロイル基からなり、IS-PO 部がシリコン (Si-O) 結合含有プレポリマーからなる。

【0069】

(実施例 2)

有機金属化合物 A として、3-メタクリロキシプロピルトリメトキシシランを用い、有機金属化合物 B としてペンタエトキシニオブを用いる以外は、実施例 1 と同様にした。

【0070】

(実施例 3)

有機金属化合物 A として、3-メタクリロキシプロピルトリメトキシシランを用い、有機金属 B としてジルコニウムイソプロポキシドを用いる以外は、実施例 1 と同様にした。

【0071】

(実施例 4 及び 5)

有機金属ポリマー材料を、以下の工程 R により合成した。

【0072】

<工程 R>

表 1 に示す有機金属化合物 A 及び B、金属アルコキシド X、有機酸 Y 並びに有機重合体 Z Z を用いて、工程 S と同様にして粘性液体 C を合成した。また、表 1 に示す粒子 Z が溶媒 S に 10 重量% 分散した粒子分散液を作製し、この粒子分散液 1 g を粘性液体 C 1 g に

添加攪拌した後、 100°C に加熱乾燥することにより、溶媒Sを蒸発除去し、粘性液体Dを得た。

【0073】

この粘性液体Dに紫外線を照射して硬化させ、硬化させたサンプルについて上記実施例と同様にして評価し、評価結果を表1に示した。

【0074】

なお、表1に示した粒子Zとの平均粒子サイズは以下の通りである。

SiO_2 粒子（実施例4：約 20nm ）

Nb_2O_5 粒子（実施例5：約 10nm ）

【0075】

（比較例1）

ウレタンアクリレート系光硬化樹脂のみを使用した。

【0076】

（比較例2）

金属アルコキシドX及び有機酸Yを用いない以外は、実施例1と同様にした。

【0077】

（比較例3）

金属アルコキシドXを用いないこと以外は、実施例1と同様にした。

【0078】

（透過率の測定）

上記粘性液体CまたはDを、 1mm の厚みの石英ガラス基板の上に滴下し、紫外線（波長 365nm ）を照射し、硬化させてサンプルとした。有機金属ポリマー材料の塗膜の厚みは $140\mu\text{m}$ であった。

【0079】

このサンプルを用いて、分光光度計により、 $400\sim700\text{nm}$ 及び 1550nm における透過率（％）を測定した。測定結果を表1に示す。

【0080】

（赤外吸収分光分析）

上記各サンプルを用い、赤外吸収分光（IR）分析を行った。

【0081】

図5は、実施例1の有機金属ポリマー材料の硬化物のIRチャートを示す図である。図5に示すように、 700cm^{-1} 付近及び 1650cm^{-1} 付近にメタクリロキシ基に基づく吸収ピークがあり、 900cm^{-1} 及び 1550cm^{-1} 付近にウレタン結合に基づく吸収ピークがある。また、 $1000\sim1200\text{cm}^{-1}$ の領域にSi-O結合に基づく吸収ピークがある。また、 850cm^{-1} 付近にトリメチルシリル基に基づく吸収ピークがある。

【0082】

図6は、比較例1の硬化塗膜のIRチャートを示している。図6に示すように、メタクリロキシ基、ウレタン結合、及びSi-O結合に基づく吸収ピークが認められるが、トリメチルシリル基に基づく吸収ピークは認められない。

【0083】

図7は、実施例8の有機金属ポリマー材料の硬化塗膜のIRチャートを示している。図7に示すように、 700cm^{-1} 及び 1650cm^{-1} 付近にメタクリロキシ基に基づく吸収ピークが認められ、 900cm^{-1} 及び 1550cm^{-1} 付近にウレタン結合に基づく吸収ピークが認められる。また、 $1000\sim1200\text{cm}^{-1}$ 付近の領域にSi-O結合に基づく吸収ピークが認められる。また、 850cm^{-1} 付近にトリメチルシリル基に基づく吸収ピークが認められる。図5及び図7に示すように、本発明においては、金属アルコキシドに起因する 850cm^{-1} 付近の吸収ピークを有することが好ましい。表1に各実施例及び比較例のIRチャートにおける 850cm^{-1} 付近のピークの有無を示している。

【0084】

本発明の有機金属ポリマー材料の硬化物は、金属原子MがSiである場合、上述のよう

に、IRスペクトルにおいて、(3400 cm⁻¹付近のSi-OH結合の吸収ピークの高さ) / (2900 cm⁻¹付近のC-H結合の吸収ピークの高さ)の比が0.2以下となるように、シラノール基(Si-OH)が含まれていることが好ましい。このピーク比を0.2以下とすることにより、高い透過率を得ることができる。実施例1及び実施例4並びに比較例2における上記IRスペクトルのピーク比を以下に示す。

【0085】

実施例1：0.1

実施例4：0.2

比較例2：0.4

なお、上記ピーク比は、図4に示すようにして求められるピーク比A/Bから算出されるものである。

【0086】

(屈折率変化量の測定)

上記各サンプルについて、高温・高湿の条件下での屈折率の変化量を求めた。具体的には、85℃、85%RHの条件下に上記各サンプルを500時間放置し、放置後の屈折率の変化量を求めることにより算出した。評価結果を表1に示す。

【0087】

(吸水率の測定)

JIS K 7209に準拠した円板状のサンプルを作製し、吸水率の測定を行った。

【0088】

(硬度の測定)

上記各サンプルの塗膜の鉛筆硬度を(JIS K 5400)に準拠して測定した。測定結果を表1に示す。

【0089】

(アルコキシド加水分解物の残存量の測定)

上記の硬化させた有機金属ポリマー材料の塗膜中におけるトリメチルシラノール基の量を測定した。具体的には、塗膜中のトリメチルシラノールを溶媒で抽出し、その抽出液をガスクロマトグラフィーで測定した。測定結果を表1に示す。

【0090】

(透過率の維持率の測定)

上記サンプルを用い、1550 nmにおける透過率の経時変化を評価した。具体的には、室温で1000時間放置した時の放置前と放置後の透過率を測定し、(放置後の透過率) / (放置前の透過率) × 100を、透過率の維持率として表1に示した。

【0091】

【表 1】

実施例	合成工程	有機金属化合物 A	有機金属化合物 B	金属・アルコキシド X	有機酸 Y	有機重合体 Z	粒子 Z	溶媒 S	吸水率	85℃、85% 、500 時間 放置後の屈折率変動量	鉛筆硬度 (JIS K5400)	透過率		赤外線分光分析での 850cm ⁻¹ 付近のピーク	700nm 加水分解物の残存量 (重量%)	室温放置 1000 時間後の 波長 1550nm での透過率維持率
												400 ~ 700nm	1550 nm			
1	S	3-メタクリロキシプロピルトリイソキサン	ジフェニルジメチルジエチルジシラン	トリメチルエチルジシラン	無水トリフルオロ酢酸	ウレタンアクリレート系光硬化樹脂	なし	なし	1% 以下	0.0001	H	90% 以上	90% 以上	あり	1	99
2	S	3-メタクリロキシプロピルトリイソキサン	ペンタエチルジシラン	トリメチルエチルジシラン	無水トリフルオロ酢酸	ウレタンアクリレート系光硬化樹脂	なし	なし	2% 以下	0.0005	H	90% 以上	90% 以上	あり	0.9	95
3	S	3-メタクリロキシプロピルトリイソキサン	ジフェニルジメチルジエチルジシラン	トリメチルエチルジシラン	無水トリフルオロ酢酸	ウレタンアクリレート系光硬化樹脂	なし	なし	2% 以下	0.0004	H	90% 以上	90% 以上	あり	0.8	96
4	R	3-メタクリロキシプロピルトリイソキサン	ジフェニルジメチルジエチルジシラン	トリメチルエチルジシラン	無水トリフルオロ酢酸	ウレタンアクリレート系光硬化樹脂	SiO ₂	イソノール	1.5% 以下	0.0001	2H	90% 以上	90% 以上	あり	1	99
5	R	3-メタクリロキシプロピルトリイソキサン	ジフェニルジメチルジエチルジシラン	トリメチルエチルジシラン	無水トリフルオロ酢酸	ウレタンアクリレート系光硬化樹脂	Nb ₂ O ₅	イソノール	1.5% 以下	0.0001	2H	90% 以上	90% 以上	あり	1	96
6	S	3-メタクリロキシプロピルトリイソキサン	ジフェニルジメチルジエチルジシラン	トリメチルエチルジシラン	無水トリフルオロ酢酸	ポリイソブレンアクリレート系光硬化樹脂	なし	なし	2% 以下	0.0001	H	90% 以上	90% 以上	あり	1	93
7	S	3-メタクリロキシプロピルトリイソキサン	ジフェニルジメチルジエチルジシラン	トリメチルエチルジシラン	無水トリフルオロ酢酸	イソブレンアクリレート系光硬化樹脂	なし	なし	1% 以下	0.0001	3H	90% 以上	90% 以上	あり	1	93
8	S	3-メタクリロキシプロピルトリイソキサン	ジフェニルジメチルジエチルジシラン	トリメチルエチルジシラン	無水トリフルオロ酢酸	シリコン系ウレタンアクリレート系光硬化樹脂	なし	なし	1% 以下	0.0001	H	90% 以上	90% 以上	あり	1	98
比較例																
1		なし	なし	なし	なし	ウレタンアクリレート系光硬化樹脂	なし	なし	1% 以下	0.001	2B	90% 以上	90% 以上	なし	なし	98
2	S	3-メタクリロキシプロピルトリイソキサン	ジフェニルジメチルジエチルジシラン	なし	なし	ウレタンアクリレート系光硬化樹脂	なし	なし	2% 程度	0.001	H	90% 以上	87% 以上	なし	なし	89
3	S	3-メタクリロキシプロピルトリイソキサン	ジフェニルジメチルジエチルジシラン	なし	無水トリフルオロ酢酸	ウレタンアクリレート系光硬化樹脂	なし	なし	1% 以下	0.0006	H	90% 以上	90% 以上	なし	0	90

【0092】

表1に示すように、本発明に従う実施例1～8は、比較例1～3に比べ、高温・高湿下での屈折率変化量が小さいことがわかる。従って、高温・高湿下における信頼性に優れていることがわかる。また、塗膜硬度も同等以上であることがわかる。また、比較例2に比べ、室温で長時間放置した後も透過率が良好に維持されていることがわかる。

【0093】

実施例1の有機金属ポリマー材料の硬化物の屈折率は1.52であるのに対し、実施例4の屈折率は1.51であり、実施例5の屈折率は1.59であった。なお、屈折率は波長630nmで測定した。

【0094】

このような結果から、微小粒子を添加することにより屈折率を制御できることがわかる。Nb₂O₅粒子を添加した場合には屈折率を高めることができ、SiO₂粒子を添加した場合には屈折率を低くすることができる。

【0095】

(実施例9)

実施例1の粘性液体Cを用いて、複合型非球面レンズを作製した。複合型非球面レンズとは、ガラスや樹脂製の球面レンズまたは平板を母材として用い、この母材の光学面上に非球面の樹脂層等を形成することにより、作製した非球面レンズである。

【0096】

図1(a)に示すように、直径5mm、最大厚み1mmのガラス球面レンズ10(母材ガラス)の上に、粘性液体11を滴下した。粘性液体11は、実施例1の粘性液体Cである。次に、図1(b)に示すように、内面に非球面形状を有するニッケル製金型12をガラス球面レンズ10上の粘性液体11に押し当て、次に図1(c)に示すようにガラス球面レンズ10側から紫外線14を照射して、粘性液体11を硬化させて有機金属ポリマー材料からなる樹脂層13を形成した。

【0097】

次に、図1(d)に示すように、金型12を取り外し、図1(e)に示すように、ガラス球面レンズ10と樹脂層13からなる複合型非球面レンズ15を得た。

【0098】

次に、得られた複合型非球面レンズと、樹脂層を形成していない球面レンズについて、図2に示す装置を用いて球面収差を観察した。メッシュパターンが形成されたスクリーン18と、CCDカメラ16の間に、レンズ17を配置し、CCDカメラ16により、スクリーン18上のメッシュパターンを拡大して観察した。スクリーン18上のメッシュパターンは、図2に示すような間隔0.5nmのメッシュパターン19である。

【0099】

レンズ17として、ガラス球面レンズ10を用いた場合には、球面レンズ特有の球面収差により、図3(b)に示すような歪んだメッシュパターンの画像が観察された。これに対して、上記のように作製した複合型非球面レンズ15をレンズ17として用いた場合には、図3(a)に示すような、メッシュパターンが忠実に拡大された画像が得られた。

【0100】

実施例1以外の他の実施例で得られた粘性液体を用いて、上記と同様にして複合型非球面レンズを作製した場合も上記と同様の結果が得られた。

【0101】

(実施例10)

<SiO₂粒子サイズと透過率との関係の検討>

以下のようにしてサイズの異なるSiO₂粒子を作製した。

【0102】

テトラエトキシシランをエタノール溶媒で希釈し、アンモニア水を添加し、加水分解重縮合を行うことにより、SiO₂粒子を作製した。このときの、pH値及びアルコキシシランの濃度を変化させて、得られるSiO₂粒子のサイズを制御した。具体的には、10

nm、30nm、50nm、80nm、100nm、200nm、400nm、及び1000nmの8種類の異なる粒子サイズの SiO_2 粒子を作製した。このような SiO_2 粒子の作製は、例えば、APPLIED OPTICS Vol. 25, No. 9 pp1481 (1986)に開示されている。

【0103】

以上のようにして得られたサイズの異なる SiO_2 粒子を、実施例1の有機金属ポリマー材料に10重量%となるように添加し、実施例1と同様にして紫外線を照射してサンプルを作製した。得られた各サンプルの透過率を図8に示す。

【0104】

図8に示すように、 SiO_2 粒子のサイズが小さくなるにつれて透過率が高くなっていることがわかる。特に100nm以下になると透過率が高くなることがわかる。

【0105】

(実施例11)

<有機金属重合体と有機重合体の屈折率差と透過率との関係の検討>

実施例1において、粘性液体Bのみを紫外線硬化させて得られる有機金属重合体の硬化物を作製し、有機重合体ZZのみを紫外線硬化させて得られる硬化物(屈折率1.52)との屈折率差を求め、屈折率差と透過率との関係を検討した。

【0106】

粘性液体Bの硬化物の屈折率は、実施例1において有機金属化合物Aと有機金属化合物Bの混合比を変化させることにより調整した。

【0107】

なお、サンプルにおける塗膜の厚みは140 μm とし、透過率は波長630nmで測定した。測定結果を表2に示す。

【0108】

【表2】

粘性液体Bのみを紫外線硬化させた硬化物の屈折率	1.525	1.53	1.54	1.55
屈折率差	0.005	0.01	0.02	0.03
透過率	90%以上	90%以上	80%	60%

【0109】

表2に示す結果から明らかなように、有機金属重合体の硬化物の屈折率と、有機重合体の屈折率との差が0.01以下になることにより、透過率が高くなることがわかる。

【0110】

(実施例12)

<反射防止膜としての検討>

本発明の有機金属ポリマー材料は、上述のように、無機系化合物と有機系化合物を含むものである。無機表面及び有機表面のどちらに対しても良好な密着性を示すものである。反射防止膜には、無機系反射防止膜と有機系反射防止膜が知られている。無機系反射防止膜は、スパッタリング法や真空蒸着法などのドライプロセスで形成される。また、有機系反射防止膜は、塗布等のウェットプロセスで形成される。本発明の有機金属ポリマー材料は、上述のように、無機に対しても有機に対しても良好な密着性を示すものである。無機系反射防止膜及び有機系反射防止膜のいずれに対しても良好な密着性を示す。

【0111】

従って、本発明の有機金属ポリマー材料により光透過領域を形成した後、この上に無機系反射防止膜または有機系反射防止膜を密着性良く形成することができる。反射防止膜としては、 SiO_2 /酸化チタン系のものが特に好ましく用いられる。

【0112】

実施例9で作製した複合型非球面レンズの上に、 SiO_2 /酸化チタン系の反射防止膜

を形成した。先ず、有機金属ポリマー材料の硬化塗膜と相性がよい SiO_2 層を下地層として約 $0.1\mu\text{m}$ の膜厚で形成した後、酸化チタン層/ SiO_2 層の4層の積層構造からなる反射防止膜を形成した。

【0113】

以上のようにして反射防止膜を作製した複合型非球面レンズの信頼性を以下の(1)～(4)の方法で評価した。

【0114】

(1) 高温高湿試験：85℃、85%RH環境中に500時間放置

(2) 温度サイクル試験：-45℃と85℃を100サイクル繰り返し

(3) 低温試験：-45℃の環境中に500時間放置

(4) 高温試験：85℃の環境中に500時間放置

以上の試験の結果、全ての試験において、樹脂層の剥離変形、白濁や反射防止膜の剥離、クラック等は観察されず、良好な信頼性を有することがわかった。

【0115】

図9は、上記(1)の高温高湿試験後の反射率を示す図である。図9に示すように、高温高湿試験後も、良好な反射率が得られている。

【0116】

比較として樹脂層形成材料として比較例1の材料を用いた場合、反射防止膜の剥離が発生し、また比較例2の材料を用いた場合には、樹脂層の白濁が発生した。

【0117】

(実施例13)

＜高屈折率透過性セラミックスの母材としての使用＞

母材として、高屈折率透過性セラミック（屈折率約2.1）を用いる以外は、実施例9と同様にして、複合型非球面レンズを作製した。

【0118】

得られた複合型非球面レンズについて評価したところ、実施例9と同様にメッシュパターンが忠実に拡大された画像が得られた。

【図面の簡単な説明】

【0119】

【図1】 本発明の複合型非球面レンズを製造する工程の一例を示す模式的断面図。

【図2】 複合型非球面レンズの球面収差を観測するための装置を示す模式図。

【図3】 ガラス球面レンズ及び複合型非球面レンズを用いて観察した際のメッシュパターン像を示す図。

【図4】 IRチャートにおけるピーク比A/Bの測定方法を説明するための図。

【図5】 実施例1の有機金属ポリマー材料の硬化物のIRチャートを示す図。

【図6】 比較例1の有機金属ポリマー材料の硬化物のIRチャートを示す図。

【図7】 実施例8の有機金属ポリマー材料の硬化物のIRチャートを示す図。

【図8】 本発明の有機金属ポリマー材料において含有させる SiO_2 粒子のサイズと透過率との関係を示す図。

【図9】 高温高湿試験後の反射率を示す図。

【符号の説明】

【0120】

10 … ガラス球面レンズ

11 … 粘性液体

12 … 金型

13 … 樹脂層

14 … 紫外線

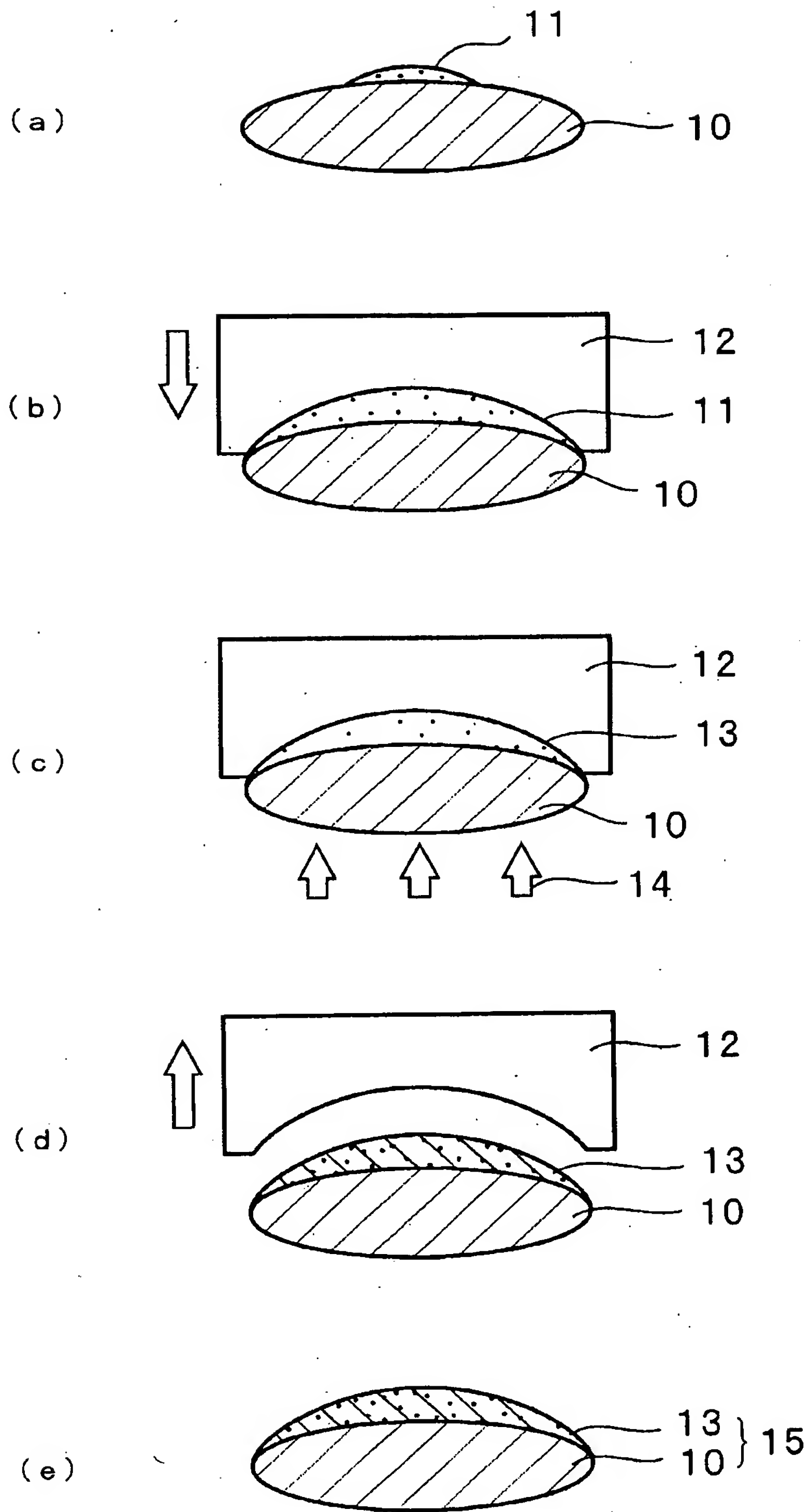
15 … 複合型非球面レンズ

16 … CCDカメラ

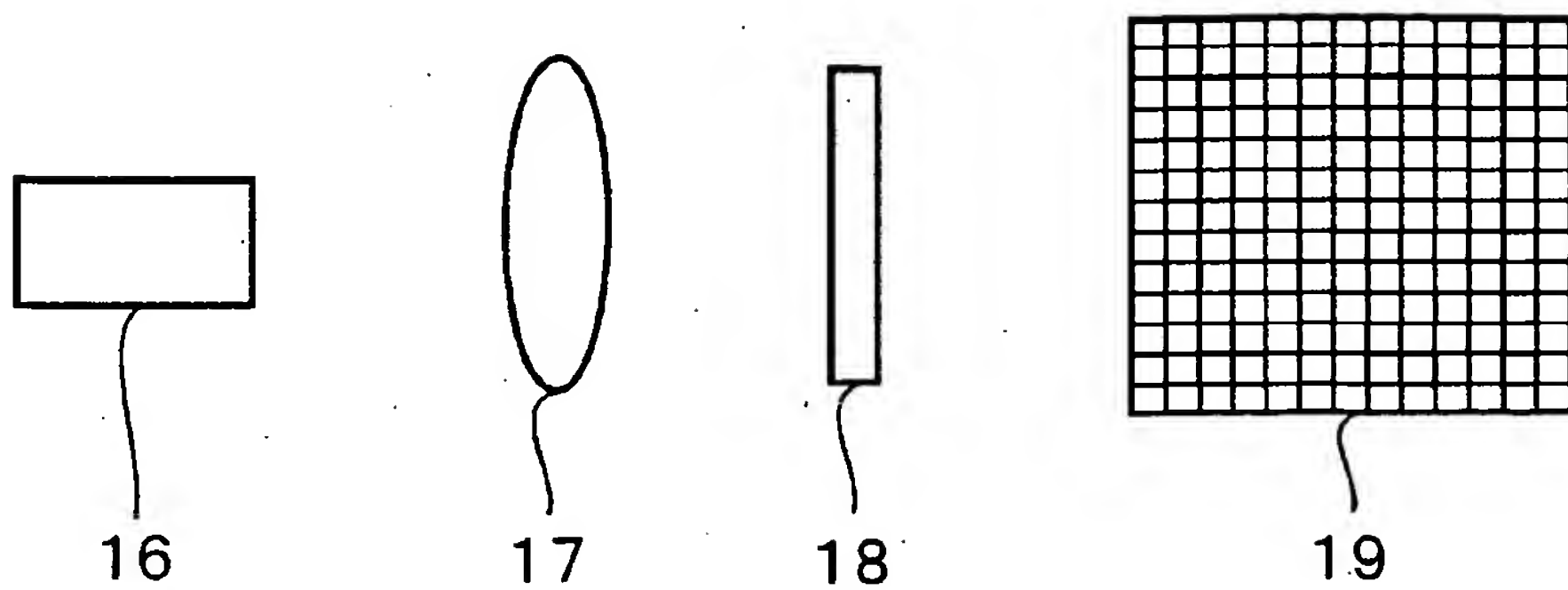
17 … レンズ

18…メッシュボタン付きスクリーン

19…メッシュボタン

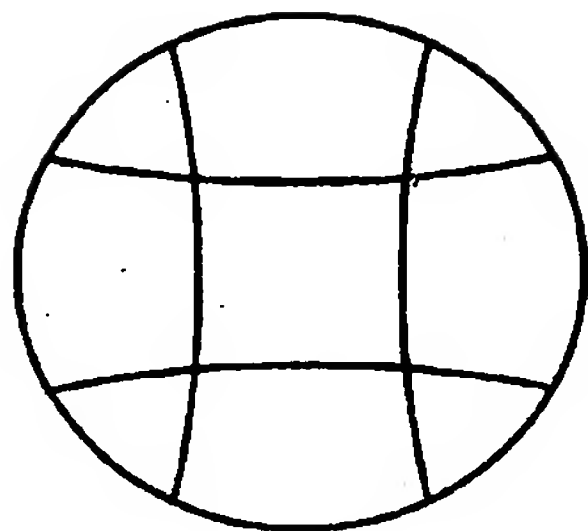


【图 2】

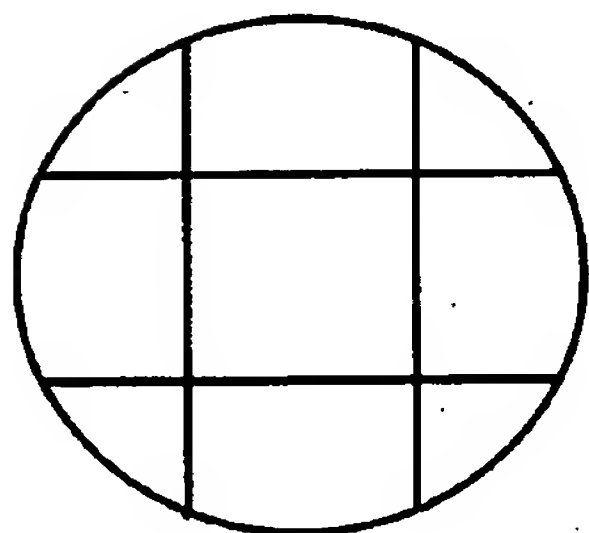


【图 3】

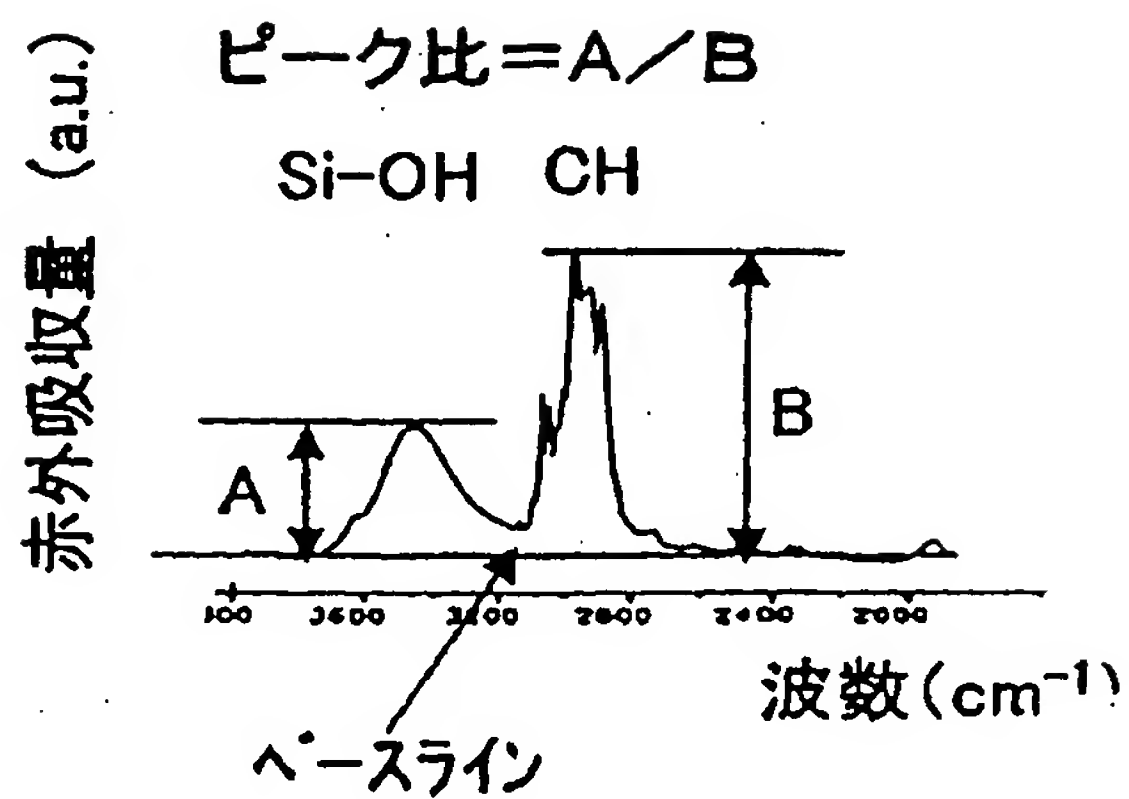
(a)



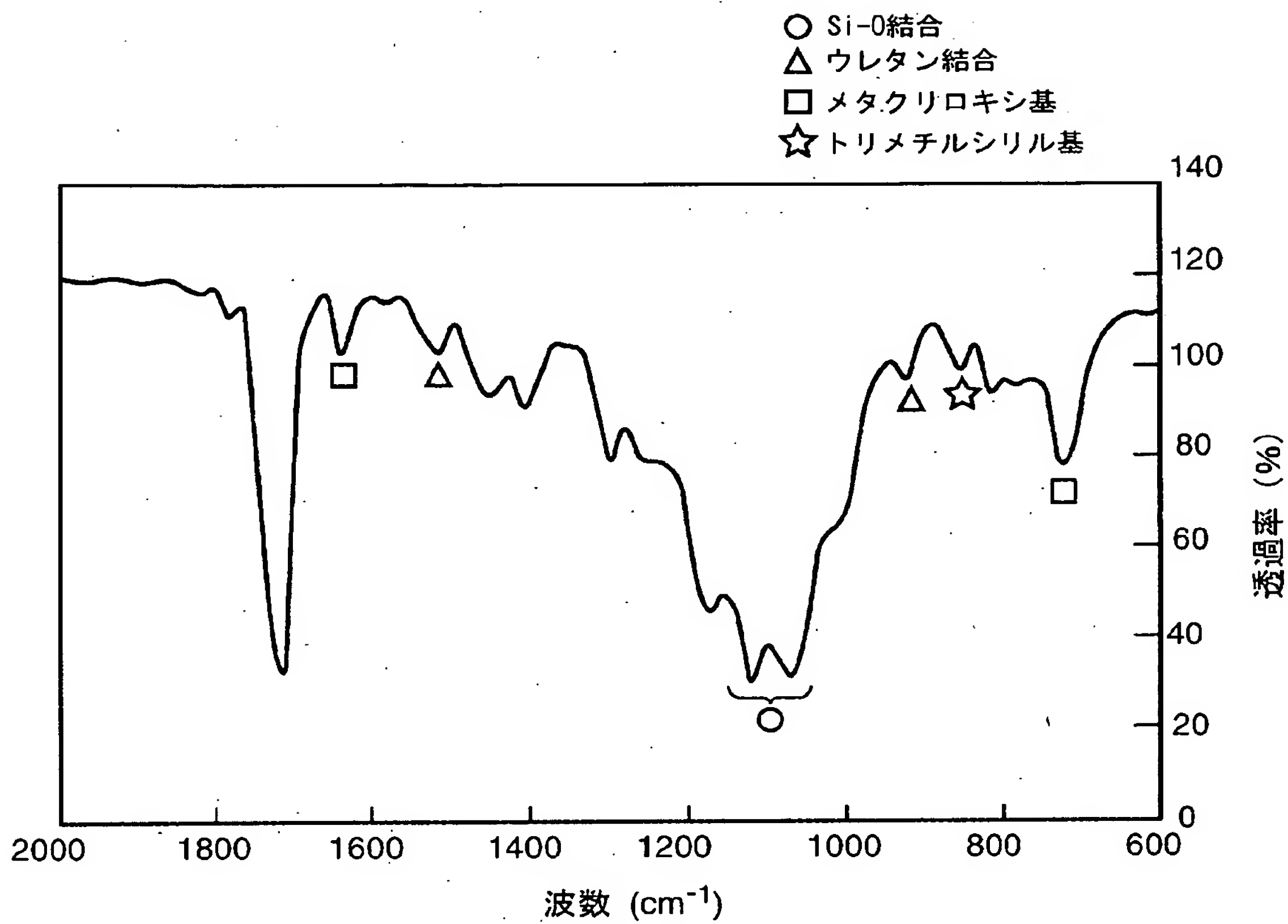
(b)



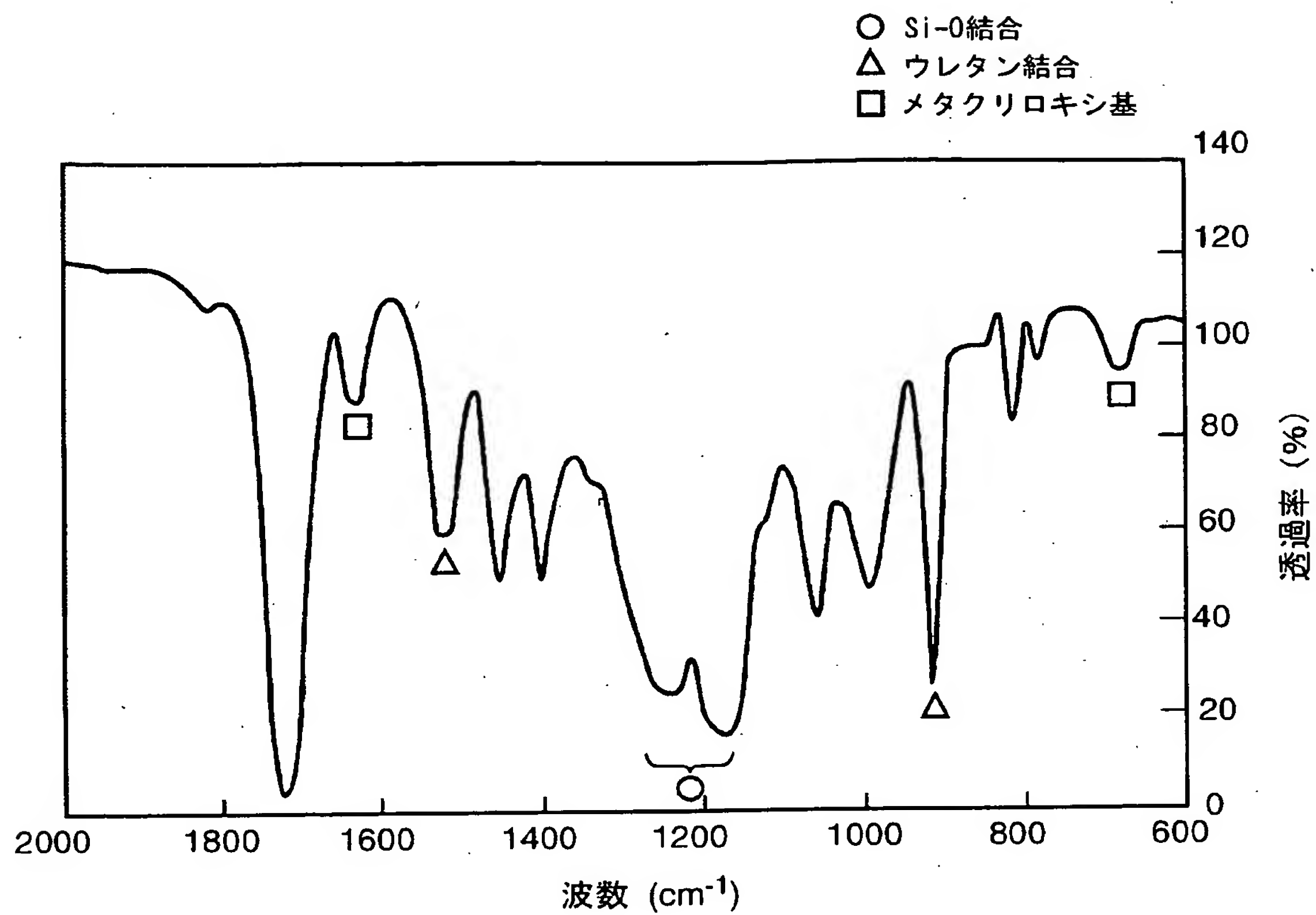
【図 4】



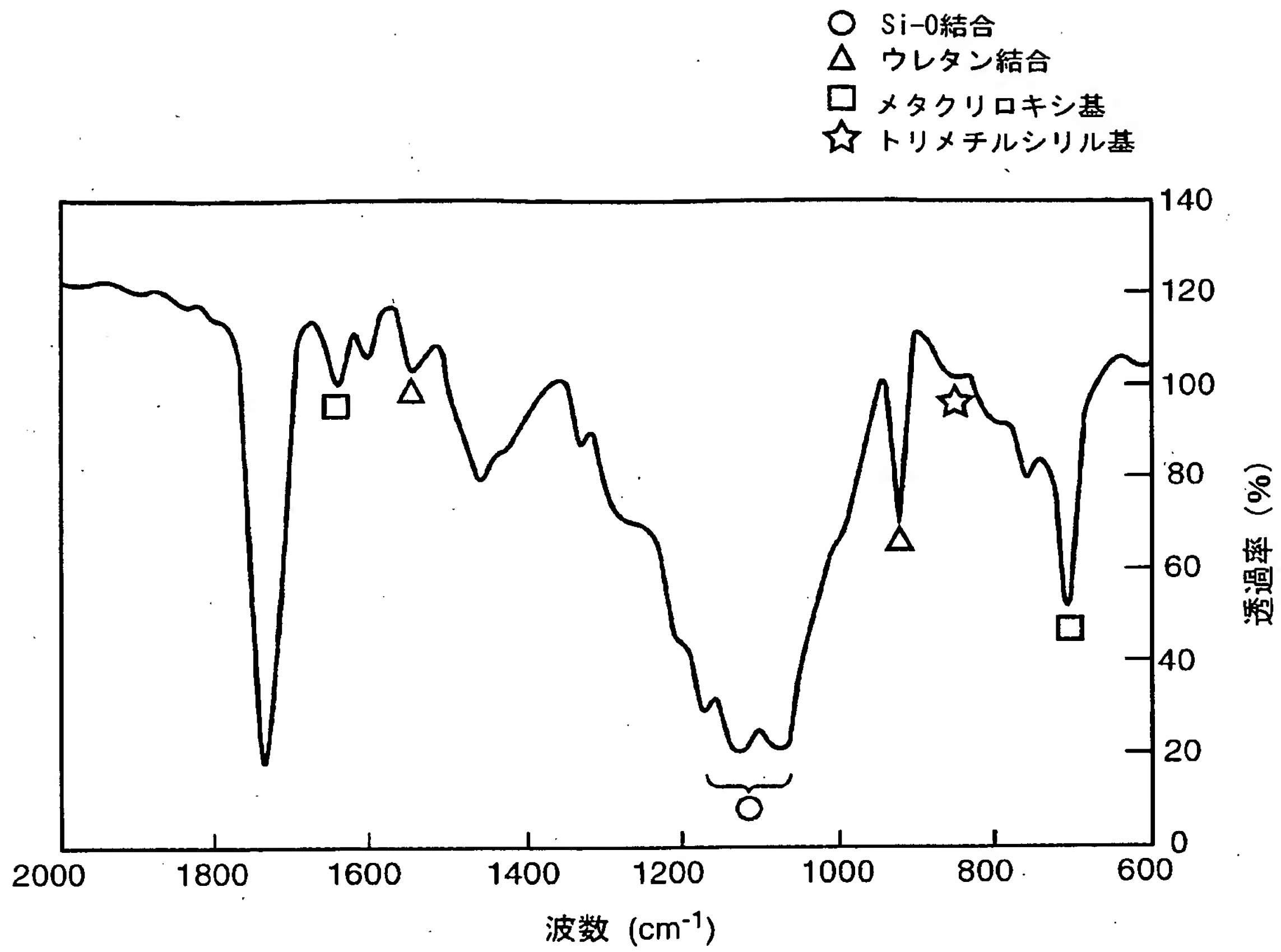
【図 5】



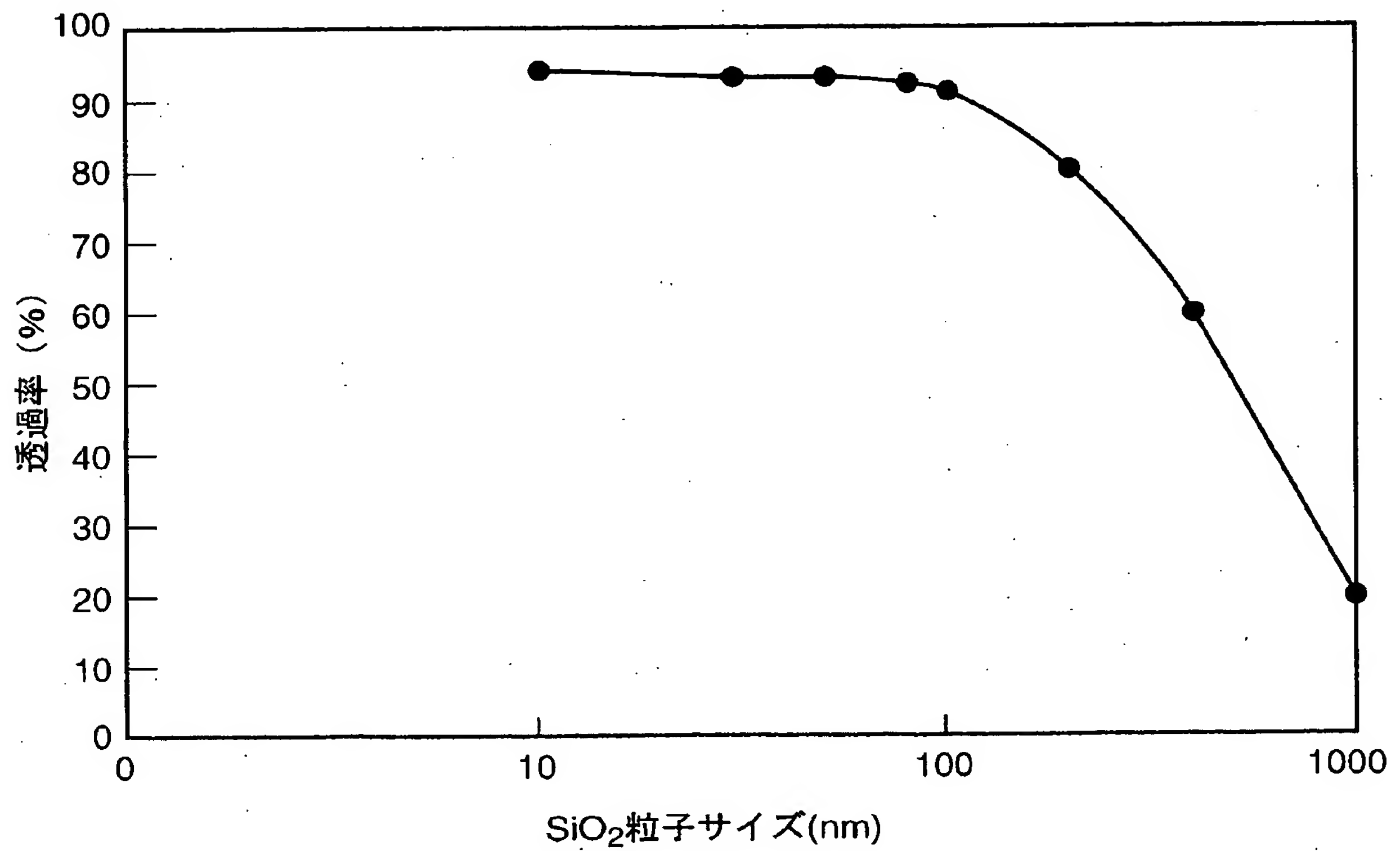
【図 6】



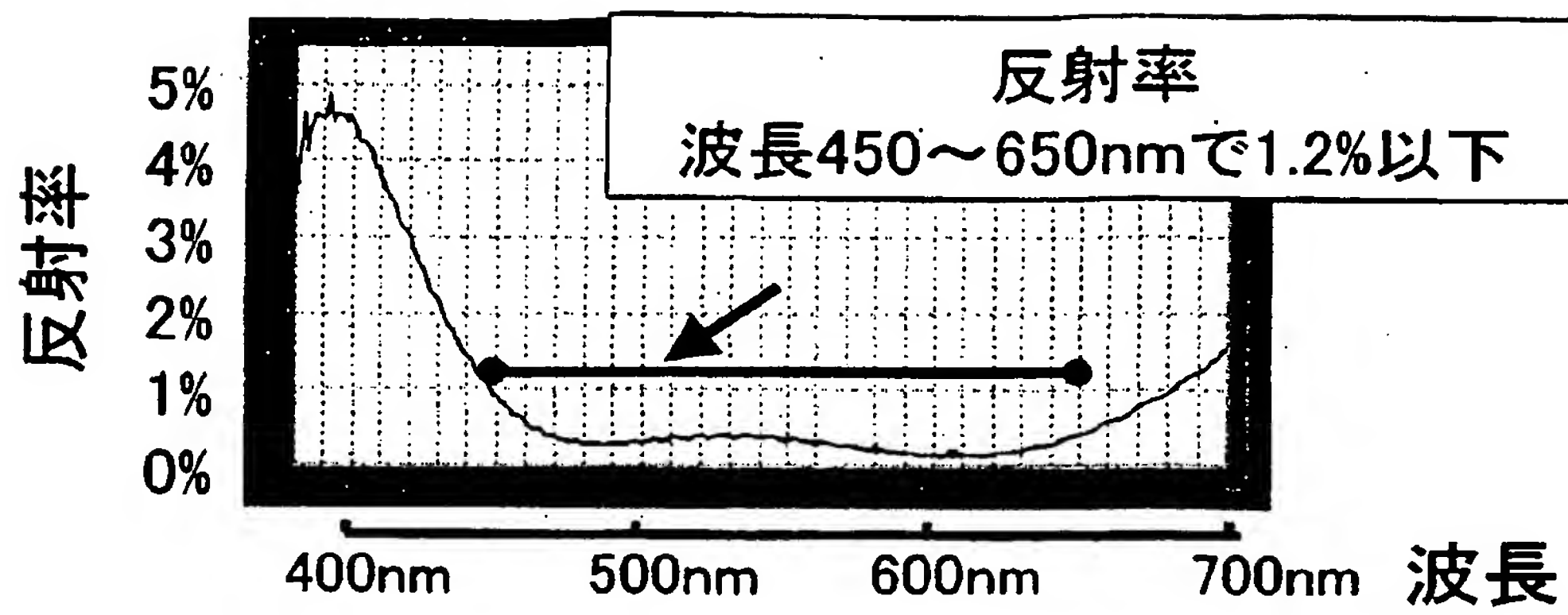
【図 7】



【図 8】



【図 9】



【書類名】要約書

【要約】

【課題】 透光性に優れ、硬化後の硬度が高く、かつ高温・高湿下での信頼性に優れた有機金属ポリマー材料を得る。

【解決手段】 $-M-O-M-$ 結合（Mは金属原子）を有する有機金属重合体と、加水分解可能な基を1つだけ有する金属アルコキシド及び／またはその加水分解物と、ウレタン結合及びメタクリロキシ基またはアクリロキシ基を有する有機重合体とを含み、好ましくは、無水有機酸及び／または有機酸がさらに含有されていることを特徴としている。

【選択図】 図1

出願人履歴

000001889

19931020

住所変更

大阪府守口市京阪本通2丁目5番5号

三洋電機株式会社